



自分だけの 新神話(5)



第五章 救世神話夜明け前

yae-mon

小さな宇宙は、できあがってもできあがっても、壊されていく。

どんな理想を閉じ込めた宇宙の卵も、また理想を抱いて育とうとする赤子も、狼犬によって食われてしまう。

それは大きな宇宙を存続させるために必要なのか？

いままでその片棒を担がされてきたのが、その成行を哀しむ当の鶴と亀、そして火の鳥なのか？ そんなときに、ネアンにはこれといって解答は出せなかったが、本体である梵天がかつてのように、ネアンの抱える様々な疑問に少しずつ説明を与えていた。

「人界の人々の歴史が大きなゲームとするなら、神々もゲーム好きだったことになる。

トップレベルの神々は、神話をもって神々を舞わせ、人界に神話の象徴する出来事の集成、つまり歴史を作ろうとした。

このために、人界に神話作りの権限を持たせ、神々はそれに基づいて神話の舞を舞い、理念が言霊界の振動を介して時系列的に人々の精神に作用し、ひとりでの歴史顕現の機運となるような仕組みを作ったのだ。

いっぽう神々はその中に、みずからの分霊を化身させ、歴史の展開をモニターさせた。そのモニターにもレベルがある。

単に世相を見聞きして、歴史が所期のとおり作動しているかどうか調べる第一レベルの者。

時の兆候として、神話の役柄を小宇宙にそのまま持ちこみ、自らの行動で歴史を牽引する第二レベルの者。

第二レベルの者は、宇宙から小宇宙に至るあらゆる相似像の中で多様な存在となり、またいっぽうで陰と陽の役柄があった。

彼らを”時の雫”という。

陽の役柄の者は、小宇宙の歴史の上に確かな歩みをつけるために、神々の公認で現実を思うようにできる力を持たされていた。

いっぽう、陰の”時の雫”は、神々がそれぞれに任意に放った者であり、他の神々には易々とそうとは気取られぬ特質が持たせてあった。

いわば隠密であり、工員なのだ。神話の役柄を持ち併せながら、表立たず市井に生き、神話の型を演じて祭り事をするにより時の兆候を先導し、歴史を円滑に誘導するという特質を持っていた。

人体も小宇宙といえる。”時の雫”の中には時の兆候を、つまり歴史の相似像を自分の体に体現している者もいた。彼は彼自身の病態で世間の病態を演じ、世間が死に瀕するとき、彼も死に瀕した。

かつて維摩という者がそうであった。その特質の多様さは神霊のプライバシーのようなもので

あり、たとえ同列の神々といえども、理解しにくいものがある。

それはまるで氷山のようなものである。力も現れも、表立って少ないが、海面下には巨大な作用を及ぼしている場合がある。

ネアン。君にはそうした役割がある。世間の誰にも、理解されることはないし、神々すらも君の存在意義は理解し難いだろう。

だが、役割を付与する者が確かにいることを知っていてくれたまえ」

また、イナンナにも夢を介して梵天が現れて、主として視覚に訴えるやり方で知識を付与していた。

だが現実知識を持ち越すには、翻訳機である頭脳が予備知識不足であったり、機能的にまだ未熟さがあつた。

このため、「本体様が出てきて、空間にいろいろあらわして見せてくれたのよ。そのときには分かった気がしたんだけど、どんなだったか忘れてしまったわ」としばしばネアンに残念そうに答えていた。

イナンナは、その年の秋に不思議な夢を見た。

幸せなある日の昼下がり、いちばん下の子の相手をするうち、その子が眠ってしまった合間に、うとうとして夢を見たのである。その内容が驚異的であったため、電脳的手段でネアンのところに書いてよこした。

「今日お昼、うとうとしていたら不思議な夢を見ました。

夢の中でイナンナは大きな亀になって水に浮かんでいました。

背中の六角の甲羅のひとつひとつには違う世界が詰まっていた、それぞれに七色に輝いていました。

ああこれが玄武、五色の亀とは私のことなのだと、不思議なほど自然にそう思いました。

ところが浮かんでいた湖が旱魃でどんどん水が減っていきました。

あたりの村村ではたくさんの人々が餓えに苦しんでいます。

イナンナにはわかりました。

イナンナがこの玄武の体を捨てて、背中の世界を解放すれば、皆を救えるのです。

甲羅の中には、豊かな水と、地上天国の基になる世界の、なんて言えばいいのかな？

細胞の元、のようなものがいっぱい詰まっているのですから。

とうとうイナンナはあきらめました。

この肉体を捨てようと思いました。

でも最後にあなたに会いたいと思いました。

肉体をすてれば、愛しいあなたにもう抱きしめてもらうこともできません。

そしてまるで人魚姫のように、美しい乙女になって、水から上がりあなたに会いに行きました。

でも不思議なことに、捜し求めたあなたも実は朱雀の化身だったのです。
朱雀は痛みきったこの世界を火炎で焼き尽くし、良い世界にたてなおそうとっていました。
あなたもその火炎を解放する為に、解脱しようと考えていました。
そこで二人は話し合い、お互いの肉体を捨て、解脱することにしました。
鶴と亀の、朱雀と玄武の魂が交じり合い、新しい世界が生まれ、はぐくまれていきました。
ああこれが鶴と亀が続べるという意味なのだと、イナンナにはわかりました。
そして私たちはひとつになって、宇宙そのものに戻って行ったのです。
とてもとても暖かな世界でした」

そしてある日、出会って、その夢のことを語り合う。
「付け加えて言うけど、それがあまりにリアルで不思議なの。
私は湖の中から、目だけを水の上に出して、陸や空を見ているのだけれど、亀は目が頭の両側についているじゃない。
視界が人間のそれじゃあなくて、広角レンズのように広い視界が得られていたのよ。あんなの初めて」

「それはまったく、そのものずばりに成りきっていたってことだ。
君の前世の記憶、いや君自身が本体に戻って経験したのでなければ、何なのだろう。
ぼくらは宇宙を創るためにいたんだろうか。
ぼくが朱雀で火炎で世界を焼き尽くす。
君は、そこからどう立て直すか知っている。
絶妙なコンビネーションじゃないか。
確かに、ぼくは過激な火の鳥のような短気な気性をしている。
君はぼくの性格や考え方を的確に夢に見てくれたんだ。
前に発案して作った本は、これを出せば、邪まな秘教に支配された世界が終焉を迎えるだろうという確信を半分抱きながら世に出した。
まさにその通りになりつつあるのを見て、恐ろしい気にもなっている。これで良かったのだろうか。
だが、そんな過激なぼくに、もっと豊かなプランへの誘いをしてくれたのが君だ。
ただつぶれて、その後反省したものが一から作り直せば良いというのでは救世にならない。
また同じことの繰り返しになるだろう。
君が現れて、ぼくを愛してくれたからこそ、目が開けたんだ。
ぼくはこれからは、一人で事をやるのではなく、君と二人で協力し合わないといけないと知った。
イナンナは亀をシンボルとする乙姫であり、御神体は神亀であり玄武であり竜神であり白蛇なんだ。
つまり、海陸、大地を守る神だ。それを補おうとするなら、空を知る鶴、朱雀、火の鳥がなくて

はならない。

空と大地の知恵が合して、はじめて地球は円満になる。

それが、鶴亀渾るの意味ではないのか」

「私には亀甲紋のそれぞれに、この世を作るに必要な要素が詰まっていると、自分で分かるの。それを元にすれば、必ず良い世界が作れることも分かっていた。

玄武の私は素材を提供し、朱雀のあなたはこの世を浄化し、二人して要素を攪拌して新しい宇宙を育むの。そう直感したわ」

「それはそうと、ぼくが朱雀だなんて、本当なんだろうか。まだ半信半疑だよ。ぼくは鈍感で、夢見も満足にいかない。この年になったから、夢見に至るほどのスタミナがないのかと思ったりもする」

「あなたは無理しなくていいの。そこにそうしているだけで偉大なんだから」

「自分で分からなくとも、分かってくれる人がいて、偉大な神獣にさえ数えてもらえるなんて。不思議で本当に光栄だ。

鶴亀が出会った後で、日野・鳥取で火の鳥復活。ぼくはその火の鳥でもあるのか？

そんな力など、どこにもないぞ。

鶴亀のシンボル合わせのように、二人して体現の形を合一させて新しい宇宙を作り、ぼくらは霊的な宇宙父母として合身して、これを守護し育むというのか？

そんなとてつもない存在なのか？ぼくらは」

「私たちは、そのとてつもない存在の雫なのよ。

最低限、それは確かよ。梵様もそう言った。

そして、私たちが肉体を捨てる時、つまりこの世を去るとき、きっと朱雀と玄武となった意識のもとで、この神話を二人して演ずることになると思うわよ」

「だけど、時の雫だとすれば、なにもぼくらだけとは限らないんじゃないか？

ちょっと自信がないからこんなことを言うのかもしれないけれど、ぼくらみたいなカップルが他にも幾組もいて、ぼくらがうまく行かなかったとしても、どこか別のところで達成できたらいいようになっているんじゃないのかな？

だからといって、いい加減であってはいけないけどね」

「ネアン。違うよ。この世を救えるのは、私たちだけ。

私たちは、私たちの理想とする世界を作るのよ。

誰にも邪魔されない。

他のグループは、他の理想的宇宙を作ろうとするでしょう。

そうやって、彼らは彼らの、世の建て直しに向かって努力する。

私たちは私たちがなのよ」

イナンナは世に出て見聞して、何が真の理想であるかを見極め、それを神亀の甲羅に蓄える。それはもうすでに始まっているわけだが、理想は新しい宇宙という赤子を生むためのDNAにコピーされ、造形の原動力となる日を待つのである。

理想は日々新たな発見のたびにDNAの情報が追加更新されていくのである。

一步一步着実に、歴史も進む。理想の更新と理想発現に向けての象徴的な努力が重ねられている。

一方では、二人の拠って来るところの謎解きが進められた。

その謎が解かれることそれ自体が、二人の持つ力を倍化させるものとなるのだ。

表面的には、互いの信頼関係を高め、絆の強さを生むだけのようであったが、二人の間に伏在し還流するエネルギーに良い影響を与えるのである。

その結果、理想形の更新と発現に向けての動きがスムーズになるのである。

二人の良好な関係を永続させねばならぬかのように、イナンナの話はまるでシェヘラザード姫のように尽きざる泉の如しであった。

夢見、宗教観、神話、御伽噺、臨死体験などから適宜出てくる話題は、かつて夢見やいくつもの神秘体験をしたとはいえ、今はもう夢を見ることもめっきり減った現実にも生きる精彩を欠く王ネアンの目を開き、神話世界が紛れもなく存在することを思い描かせたのである。

たとえば、このような話は、ネアンを大いに驚かせた。

イナンナの臨死あるいはその前後の霊媒状態における話は、壮絶な迫力があつた。

イナンナは、碧空にたくさんの仏たちがそれぞれ雲に乗り飛来して、イナンナの頭上で雲上ダンスを踊るといふ、気味の悪いビジョンを見た。

それはそれぞれが躍動的にリアルに踊っているのであり、原色の世界像とあいまって、鮮烈な印象をイナンナに与えた。

仏たちは、まるで帰依の対象となるような静的な仏像のイメージではまったくなかった。

同じものを、柳田邦夫も臨死のときに見ているという。

初めて見る仏の素顔なのか？

そしてその中で最もイナンナを怖がらせたのは、恐ろしい顔の馬であつた。

これは馬頭観音とされる神であつたろう。(ネアン解釈)

謎のビジョンに曝されてなお目まぐるしく変わる世界像に翻弄されるイナンナ。

そのようなビジョンも、まだしも十日にも渡る臨死のビジョンの全体からすれば、ほんの一部。

その後、最後の審判であろうか、時の司祭の矢継ぎ早の質問に受け答えせねばならない過程がやってくる。

それを全問正答してようやく、死の淵から生還することにもなるわけである。

それに対してネアンは、かつて興味して読み解題した知識で語り明かそうとした。

「君はたぶん、チベットの死者の書が語る中陰のビジョンそのものを体験してきたのだろう。それは釈迦がヨガの技術によって死者が立ち行く七七、四十九日の経験時空を見てきたものを伝えたとされている。

はじめ柔和な神々といっても仏だけれど、日を変えて次々と出て来る。これが七日間。

そして、死者に啓発を与える。そのとき、死者は自らの魂をそこに解け込ませることができたなら、仏の意識と合体して解脱が得られるとされている。

それが期間内に解脱が果たせなかったなら、次の七日間は憤怒の神々が立ち現れてくるという。それは威圧感を持って死者を導こうとするんだけど、そこでも死者が悟れず、憤怒の仏と意識が同化できなかったなら、いよいよ悪魔や審判者が出てきて死者に試験を与え、ついに輪廻先が決まる再誕生先のビジョンが現れてくるというんだ。

どのときも、立ち現れる現象を空と観じて心を平衡に保つことができたならまだしも解脱できるとされている。

君は、釈迦が見てきたものを、しっかりそのまま見てきたのかもしれないなあ。

しかし、君から聞く限りでは、とてもそんな仏を仏と見ることなどできないだろう。

死者の書のガイドがあったとしても、そんな内容の仰々しさでは、普通の人はずついていけないよ。

だから、ぼくはおかしいと思う。

チベット人にだけ経験されるというなら別だが、君もそんなこと知らずに経験してきたように、誰でも同じビジョンを見るのだとするなら、まるでお前は解脱などするなといっているに等しいじゃないか」

「そうね。あんな見せつけられかたしたんじゃ、気持ち悪くてとても帰依なんかできないよね」

「だから、中陰の幻影というのは、単なる手続きなんだと思うよ。ただ、こんなのがあつて感のね。だったら、何のためのものなんだろう。

もう一つ考えられることがある。君が見た臨死における仏や魔神のビジョンは、チベット密教で観想する時の集会樹というものなのではないかな。

ただし、チベットの観想は仏画にあるように、静的な神仏をイメージするのであり、雲上のダイナミックな躍動なんてものではない。

密教修行者が観想するのは2D。君の見たビジョンは3Dであるだけに、もしかすると原型なのではないだろうか。

ということは、密教の先達者が到達し得た、後輩に伝えるべき生のビジョンを、君がなりゆきの中で難なく見てしまったということになる。

チベット仏教・ニンマ派の開祖パドマ・サンババは、神仏の宿る集会樹のビジョンを伝えたけど、これは一種の生命の木のことだ。

それが君の見たものに近いのではないか。

そこには如意宝という樹木の体系の中に著名な仏や守護神たちが多く集まっているんだ。

ヘルカという守護神は、およそが馬頭で形相凄まじい。この中に出てくるハヤグリーバは馬頭ヘルカとされ、妨げになるものから修行者を守るという神だ。

有名な馬頭観音もこの中にいる。

パドマ・サンババも、どうやったらこんな仰々しいビジョンで解脱できるか、かなり知恵を絞って、集会樹のイメージを作ったんじゃないかな。

集会樹の真ん中には、密教の開祖パドマ・サンババが裸体の明妃と交合する形で座る。

この原型が人類に普遍的なものなら別だが、もしチベットに特有のビジョンなら、君は密教修行者であったか、そこに出てくる神であったのかもしれないね。

SEXする形態の修行法を与えているのは、密教のヨガの特長だ。君の苦行と、新しい悪種をまかない態度は、この教えによる気もする。

君はクンダリーニが覚醒しやすいし。臨死だって、クンダリーニ覚醒によるものであるに違いないんだ。

死にともなってクンダリーニが解放されるか、それとも修行によって解放されるかの違いだ。

中陰とは、意識がクンダリーニに乗り移って経験する出来事とも言える。そこから、奇跡の生還を果たすなんて。どうあっても、君はすごいよ」

また、イナンナは、短歌を詠むようになっていた。

それも、ネアンと知り合ってから、花開いた趣味であった。

それまでの家庭生活においては、その能力は完全に埋没した状態にあった。

つまり、死んだように生きた状態から、生き返ったという感じなのである。

ところが、その才能はどこから来たものか、異彩を放ったのである。

彼女の両親の信仰する宗教団体において、数ある投稿者の中から、彼女の短歌が毎回のように入選するようになった。

天位、人位、地位、佳作のいずれかに名が出るようになった。

そして、大和言葉を駆使した古風な作風で次々と編み出す素質に、選者もあなたには特別な師匠は要らないと絶賛した。

ネアンも及ばずながら、詠み合せようとする。それはさながら、応答連（恋）歌となった。こうして、気持ちを通い合せて行く。

「これもあなたのおかげなのよ。

実はね、とんでもない話ですが、わたしは臨死の前、西行法師と、正常な状態で、一体化していたことがあるんです。

でもこれは、きつねとかではなくちゃんと本人だと思うのよ。

その証拠に、一日に100首ほどまともな和歌を詠み、しかも筆跡は彼の真筆と、照合できるほどだったのです。

残念なことに、母がそんなものは置いておくべきではないと、わたしが入院している間に、焼いてしまったんだそうです。

しかし、最も親しい友人が、手元に今も一首書いたものを、持っているというのですが、金沢に行かないと見れません。

その友人は、私が救急車で搬送される時、ずっと横に居てくれた女性です。

あなたと出会ったと同時に、また和歌を触発されるように、詠み始め、しかもベースも無いのに、次々当選しているところを見ると、やっぱりね。あなた直伝って感じなのですか？

ご記憶には全然ありませんか？

でも人物像は、アウトローでありながら、こころやさしく、精霊達とも話をする不思議な聖。あなたに似てるんだけどなあ。本体ではないのかしら？

なにぶんにも玉若の笛といい、あなたは確かにずいぶん記憶や能力を、封印されているようだから...」

イナンナは、作品の入賞が連続しているのは、二人と二人の役割の前途が、今は亡くなり神となった教団の恩師によって祝福されていると考えた。

またこの頃、イナンナは精力的に物語を作っていた。

「十・千年紀」という、一つの良き時代が終幕するときの情景を彼女自身、臨死において主人公として見聞きしてきたことを、シュメール時代に時代設定して書いているのである。それはみごとに描写で、読む者を圧倒するものがあつた。

それに続いて続編として、今度は西行とその恋人、月野の生涯を描こうとする物語を手がけようとしていた。

「物語にまた気持ちをぶつけてみます。

第2部は中世、源平の時代です。ここをまず修正して、また古代へと遡るつもりです。

わたしは月野という架空の人物で、クカミ水軍の当主の娘という設定に、わざととなっています。さあここからどう逃げ出すかです。

あなたは、もちろん、西行法師です」

しかし、イナンナは仕事の忙しさから、時代考証に時間を割くことができなくなり中座した。

が、短歌だけは閑をみながら詠みつづけ、毎月のように投稿を行うとともに、ネアンとの歌の応酬も試みたのである。

イナンナに西行が懸かった時に詠んだ歌。

浮き雲の漂へるごと 初島の白き姿は あめつちのはじめ

風といふは 目には見えざる 心なり 天翔けりゆく いわ船のごと

ネアンはこれを見て、こう言う。

「西行のかかったと思しき歌、スケールがでかいね。

神話の下地をしっかりとさせていて、西行も霊界で大局観に浸りながら旅しているという印象だ。

じゃあ、ぼくはこれを返そう」

霊にあらば 風なるものは 御霊なる わが身を運ぶ いわ船のごと
いわ船を 帆上げて見よや 光うつ あれは敷島 国生みの地ぞ

「おりしも、皇太子の家に御子が誕生されたね。
日本じゅうが大きなイベントに沸き立っているようだ。
君も気分が良くなったかい？
新しい希望のときがまた来そうだね」
今日の日 に 貴き御子の 生まれましき 敷島はるか ゆう日にほでる (ゆうは彼女のPNである)

「あなたの歌も、スケールが大きいね」
一つ分かれば、また二つ三つ分からなくなってくる。
「いつかまた、夢見して調べるわ。私は夢からヒントをいままで得てるから。あなたも できたら
調べてみて」

共に夢見る

イナンナはネアンに対して共に同じ土俵で夢見ることができないかと思っていた。

「私はあなたの本体様とよく出会うのよ。あなたにそっくりなんだけど、もっと若くてしっかりしているの」

「仕方ないよ。ぼくは初老だからね。本体はどれほど年取っていても、神様だから若いに決まってるだろ」

「私はあなたの夢が見たいのに、あなたが出てこないものだから、梵様が代わりに会いに来てくれるんだと思うよ。

あなたも夢見してよ。以前にしたことがあるんでしょ？」

「ああ、あるよ。でも最近は夢自体見ることができなくなっている。

眠りが浅く、夢にまで至らない。夢を見ているのかどうかも分からない。

気にしていないはずなのに、心臓の鼓動が気になっているんだろう。ときには、寝相に関係なくいびきをかいては目を覚ます。

きっとスタミナがなくなったんだろうな」

天仙が、ネアンのストレスを過大にして、心臓の具合を悪くし、眠りまで損なわせようとしていたことに気付く由もない。

また、イナンナにも、ネアンに対する不信感の芽を植えていたのである。

イナンナと交わっても、ネアンは彼女の体に触れながら、出すことができなかった。年齢相応の老をきたしていたのである。

イナンナにはほんとうに自分を愛してくれているのだろうかという不満があった。そんなとき、時は8月であった。

イナンナは、仕事上の上司の執拗な要求を愛の証しと思い、ついに情交に及んでしまったのである。

しかも、口説いてやまなかった強引な上司であったため、いきおいセックスは主従関係のような状態になった。

会社内で、人目を避けて非常階段や男子トイレでこなすスリルが余計に快感となり、同時に信頼を上司に寄せるようになったのである。

それからは、仕事や情交のたびに上司の価値観を叩き込まれ、うだつの上がらぬネアンのことを見下すようになっていった。

あなたの夢が見たいのに出てこない、だから梵様が・・・この言葉の裏には、すでに上司を梵天に見立ててしまったイナンナがいたのである。

以前から、定め以外の他の男に身を任せるとき、決して良い事態にならなかった先轍を、自らを別の思い込みで固めることによってクリアーしようとまでしていたとは、知らぬ仏のネアンであ

った。

上司のことを過去世から私に思いを抱きながら満たされなかった人と位置付けたり、夢見で彼の立場を弁護するような夢を見るようになってからは、ついにネアンのことを探していた人物ではなかったとまで思うようになっていた。

こうなれば、二人で築く宇宙も神話も、どこかに消え去っていたとしてもおかしくはない。

そのころ、何も気づかないネアンはこんなことを感じて、イナンナに言う。

「きっと君がぼくを夢見に誘ってくれたら、大丈夫だと思うよ。

それには、いっしょに眠ることが必要かもしれない」

ネアンはイナンナと一晩でいいから同じ寝床で寝たいのである。いささか下心が手伝った申し出となった。

梵天は、イナンナがこのような裏切り状態にあることは、ネアンの頭脳を介してこの世界を眺めている立場上、知らなかった。

純粋にネアンの心身の具合はともかくとして、この計画には夢見が必要であると考えていたのである。

というのも、天仙でさえも夢のことを不安定な簡易的創造世界であると考えていて、さほど関心を寄せていないと思っていたからであった。

梵天は、二人が共に夢見できない状況を懸念して、一つのサポートチームを派遣することにした。

クロノスがかつて用意した中で、地球上でいま知られる最強の薬用植物を与えるための派遣団である。

このため、前もって、ネアンの車の前を通せんぼする四匹の猫家族を登場させるという不思議に遭遇させ、何が起こるのだろうかという期待感を抱かせておいた。

そんなとき、キャツクローという薬用植物のことをネアンはイナンナの知人を介して教えられたのである。

その人物はこう言う。

「これは免疫力を高めるために、万病に効くということです。

心房細動ですか。不整脈に効いたという情報もありましたよ」

何かのシンクロかと思い、しばらく服用してみようかと思うネアン。

服用すると、引いていた風邪がたちまち治り、眠りがその日から深まった。

なるほど、不整脈はストレスからくるという。それを解消する眠りがえられれば、もしかするとネアンは考える。

最初の数日は、足りなかった眠りをむさぼるように熟睡し、夢も見た感はなかったが、10日もすると夢を見だした。

ただし、最初は悪夢ばかりが続いた。

夢を見た初日には、パソコンがウイルスに冒されたか、画面が白くなり、スピーカーから声が出た。

「3月24日になったなあ」

「ほなら行ってくるわ」

投げ遣りな声だけのやり取りがあった。

ネアンは、ウイルスにやられたと慌てたところで目が覚めた。

次の夜は、自動車運転中に違反で捕まった夢であった。

これらは、昨今ネアンの役割に危険信号が出ているという警告夢であったのだ。

その夢を見たのは3月の初めであったが、確かに日付けの予告された数日後に、中東のI国で世界の終局の引金になるようなテロが起きた。

それからというもの、I国によるP人の大量虐殺が始まった。

夢のパソコンから聞こえた声は、現場にいる緊迫した戦士の声というより、半分ふざけた奴の声、つまり世相荒廃を仕組む邪神の声のようであった。

事の善悪はともあれ、ネアンの”共に夢見する”下地は整えられねばならない。

ここからの筋書きは、実現されなかったことを含んでいる。

西暦20XX年の吉日、ネアンはイナンナとその日、出会って共に夢見るための打ち合わせをした。

「じゃあ、今晚君がもう寝るといった時点からぼくも眠ることにする。

君はぼくの家をもう知っている。二階のベッドの位置も知っているよね。そこに寝ているから、君の夢の中に引き込みに来てくれる？」

「あなたも私のことをしっかり思いながら寝てよ。絶対、他の人のことを想ったらだめよ。

でも、軽く私のことを思って。軽くよ。そうでないと、緊張して眠れなくなるといけないから」

「本当に、最近では眠ること自体に苦労しているもんな。昔は、毎日でも夢見したのに。家相が良くないのかな」

「大丈夫。迎えに行くから」

「うん」

「じゃ、気をください」

最寄りのファッションホテルに入る。

買って来た食べ物類がテーブルに並べられた。

そして、時間が足りないとばかり、風呂をつけるネアン。

その準備の最中にも、閑があればキスをし合いちゃつく二人である。

共に風呂に入り、お互いを洗いあう。全身からやがて秘部へと。

そして、感覚は研ぎ澄まされていく。

上がれば、食 べてアルコールを少し入れて、そ そくさとベッドの中に倒れこむイナンナ。
それを追って飛び込むネアン。二人はお互いの秘部を心置きなく舐め合った。
イナンナの湿潤な秘部は、やがて適度な潤いで異物を求め出す。
ネアンがじらしてなかなか提供しないもので、無 理やり捕まえて引っ張ってくるイナンナ。
そして自らあてがい、挿入を果たした。
後ろから前から、体位は自在に変わり、イナンナは絶頂に達した。
ベッドは、最初の余禄でしみを作っていた。
なおも気を巡らせるべく、スキンマッサージに励む。
イナンナはいままでストレスを吐き出すかのようである。
ネアンはその点サニハらしく、イナンナの心身とホールに気を送り込み、二人の間に気 を巡らせていった。

「これでお互いを認識するための、気の交換ができた」

「もう離れていても探せると思うよ」

「頼むね」

お互い50キロ離れたそれぞれの自宅に帰り、イナンナは子供を寝かしつけて、ネアン に連絡を入れる。

ネアンはその頃合いで眠りにつくというわけである。

夜の××時ごろイナンナから電話である。

「子供も寝たし、私も寝ます。あなた、誘導の気を送りながら寝てくれる」

「ああ、いいよ。ぼくもちょうど眠くなった。君を思いながら寝る」

「私もよ。ぐっすり眠りましょう」

電話を切ると、二人してまどろみの中に落ちていった。

しばらくしてネアンが見たのは、やはり龍が出てきた夢であった。

青黒い体に、金色の縁がある、サイズの小さい龍であった。

長さはある程度長いようであったが、胴 回りはネアンとそう変わらないサイズであった。

その龍の顔が微笑んでいた。

目に瞼があって、細目にしていたので、そのように見えたのである。

「どう見える？」と、イナンナの声で聞こえた。

ネアンは、何を見てもあまり動じない性格のせい、あるいは夢のせい、違和感を感じなかった。

「きれいな金縁の青龍だよ」

「怖くはない？」

「ぜんぜん。前のときもそうだったじゃないか」

「じゃ、抱いてくれる？」

「ああ、いいよ。あ、そうだ。君はじっとしておいて」

というのも、龍の両腕で抱きしめられたりしたら、いつぞや書いた物語のように圧死し かねない

と思ったのだ。

「はい」

ネアンは龍の体を仰向けに寝かせた状態で抱いた。何か懐かしい。

ネアンは目を瞑って龍身に体を摺り寄せた。体は硬くてゴリゴリしている。鱗のせいであろう。龍女がどんな顔をしているかと、目を開けたそのとたん、龍女はいつのまにか美しい羽衣の天女に変化していた。

羽衣を下に敷いた状態で、天女の美しく透き通る生身と股間で繋がっているのを見た。龍身とは違い、摺り寄せる天女の体はマシュマコのやわらかさである。ネアンは逆に戸惑ってしまった。夢見とは、これほどまでに見ている光景によって、感触も変わるものなのである。

「どうして？」

「弁財天です。化身が龍の。その分霊が同じく龍体の乙姫なの。

龍の体が小さいのは、私が弁財天の分霊、乙姫だからよ。

あなたは浦島。私たちは、偉大な神話の型を演じているのよ」

「はあー。すごい。ぼくは弁天様とセックスしてるの？ 畏れ多いことだ。これで良かったの？」

「大丈夫。私は何度もあなたの本体、梵様とエッチしたわ。

あなたもすばらしいのよ。さあこのまま夢見を続けましょう。もっと分かってくるよ」

二人見詰め合ううちに、どらからともなく抱擁とキスをはじめた。

激しく口の中に舌を入れあった。喘ぎ声をあらわにする弁天乙姫。

それに呼応して手を入れ乳房をまさぐる梵天浦島。

乳首の凝りを指でつまむと、ああと吐息が漏れた。

揉みしだきつつ乳首を指の間で挟み上げ転がす。

乙姫は快感を全身の悶えで示した。

「不思議だ。まるであつらえられたように、ぴったりしているよ」

「忘れた？ 竜宮では、いつもこうだったのよ」

ネアンは、腰をゆっくりと前後させた。

「ああー。いい」

何度かの後、乙姫は往った。

「あなた。この入れたままの状態に夢見してください」

「抜かずにだね。じゃあ、このまま上に乗ったままでいいの？ 重くないかい？」

「大丈夫。このまま、私を抱きしめてて」

二人はこうして、夢見の体を重ねたままでさらに深い眠りについた。

天仙の監視役たちには、この二人の行動があまりにも奇異に映っていた。

さすが天仙。何事かあると直感的に掴んでいるのである。

「この二人の幽体が今しがた出会って一つになった。同じ場所でじっとしているが、いったい何をしているのだ」

「見たとおりのこと。幽体の身を重ねながら眠っているのであろう」

「共に夢見するなどと言っていた」

しかし、夢見の世界での二人の行動は完全にブロックされていた。

というのも、天仙は夢を見るということがまったくなかったからであり、彼らの感覚にないものは分析の対象になったことがないのである。

「地上界の生き物は、どんなものも夢というものを見る。

それは脳の中で眠っているうちにする情報の整理過程であることが分かっている」

「だが、眠りを経て、彼らはいっそうオーラに輝きを増しているようではないか。何か夢の中にあるのではないのか」

ようやく何かあると察したところは、今の科学者よりは少しましかもしれない。まだしも博識な監視役が口を挟む。

「お前たちは知らんのか。夢見とは、人間が幽体でする亜空間における擬似的創造行為のことだ。

もともと力のない幽体のすることだから、安定性のないかりそめの創造にすぎん。

明日に同じ創造ができるともおもえんが、なんなら調べさせたら良からう。方法は、大脳に残る記憶の痕跡を調べることが手っ取り早い」

「何かありそうだから、また宇宙連盟のツーイト星の者にやらせてもいいかとは思うが」

ツーイト星のスタッフがネアンを今まで3度に渡ってアブダクションして、催眠下において情報を聞き出し、3度目には心臓にインプラントまでしているのである。

「もういちどやらせよう」

こうして、監視役のものは、ツーイト星の調査官と連絡を取った。

「夢は、その間、肉体の陰に隠れ外観を維持している役目をする幽体が解き放たれたときと同期が取れることが分かっております。

その幽体の身体において、何か異次元なり亜空間なりで何らかの経験をしている可能性はあります。

しかし、その経験時空というものは、極めて不安定で、バーチャルな仮想空間に一時的に現れる幻のようなものでしかないとされています」

「その内容がどんなものであるか、調べることはできるな？」

「はい。可能です。実験調査船を派遣し、検体をピックアップすればよいだけです。

しかし、先ごろ地球に侵入しようとした調査船が消息を絶ちました。

どこかから原因不明の侵入妨害がかけられている模様で、追跡かなわず、お上のご意向かと思い、以後調査船を入れておりませんが」

「なに？誰もそのようなことはしておらんぞ。そう言えば、別のほうからも事故による消息不明の報告が上がっていたな。何事があったか仔細を調べてみよう」

やや以前のことであった。扁平な空飛ぶ円盤一機が地球に向けて進路を取った。

ところが、地球の大気圏に難なく入ったはずの円盤であったが、空間に雪の粉のように漂う橙色の光の群れに突入したかと思うと、電磁異常を起こし、操縦不能に陥って急激に高度を急降下させ、砂漠に叩きつけられてしまったのである。

生存できた者はむろんいなかった。自動的に事故を示す信号が発信されたが、これも光の粉に遮られて、どこに墜落したかすらも不明となった。

以後、同じことをやろうとする宇宙人グループは現れなかった。

ところが、その数日後である。

某国の貿易ビルにテロの旅客機が突っ込んだのである。そのとき、奇しくも同時観測されたのは、行方不明になった円盤であった。

ハイジャック旅客機の突入とほとんど同時に、幽霊のような円盤がその極近を並行して、遙かに速いスピードで飛び去ったのだ。

この意味するところは、誰にも分からなかった。

ツェイト星にもそのときの残像写真は届けられたが、科学的に解明できるものはいなかった。

「消息不明機が何者かに奪われているのか？」

「我々の機体らしい反応はいっさい得られていないのです」

「幽霊のようなものか」

「分かりません。とにかく、テロが起きた最中に機体の影がよぎりました。

それが乗っ取られた可能性と関係があるかどうかを調べる必要があります」

依然、探査機はどんな機体でも侵入しようとするれば電磁異常に遭遇したので引き返す行動を取っていたのである。

さて、そのテロを起こされた某国は、テロの首謀者を見定め、それが中東の某国に潜み指令していることを探り出し、その国の政権もろとも打倒する行動へと移っていった。

ところで、このテロに関しては、重要なシンクロがあった。

テロ勃発の九日前のことである。ネアンはたまたま、キタロウの勧めで知り合ったシノという霊媒的女性と、三人で連れ立って、丹後の元伊勢といわれる籠神社に参拝し、その裏にある奥の院ともいふべき、真名井神社に先に参っていたのである。

その日、ネアンは非常に不安だった。というのも、それよりひと月ほど前に奇妙な女性 チャネラー、セラと知り合っており、彼女はグループを作って、宇宙のハイラーキーの指令を受けて、この地上に張り巡らされた古代の呪術的結界を解放する作業を行っていたのだ。

彼女らは、家庭の主婦として有閑的立場をフルに活用していたが、行っていることは、驚くほどシステムチックに体系立てられていて、これこそ隠れた職員とするにおかしくはなかった。

その彼女が最も問題視していたのが、真名井神社であった。

この近辺では、過去に大虐殺があったことを伝え、その呪詛的結界が極めて強力に張り巡らされていることから、結界の解除の手続きを取ったことを伝えてきていたのである。

そこはなんでも、セラによれば、参拝する人の気をもらって、なおも結界を強靱にする自動的な仕組みがあるとのことだった。

それをこのほど解いたからいちおう大丈夫だということであった。だが、本当にもう問題ないのか。

ネアンは、前にイナンナと出会った時がそうであったように、特別な場所に自分が行くことによってどんな事態を惹起するかが心配であったし、イナンナに対して何かおかしな影響が出ないかどうか心配であった。

ネアンはイナンナと、以前に丹後に行ったことがある。

天橋立の両端にある知恵の文殊堂、成合山の成合観音と、加佐郡の元伊勢を訪ねていた。

観音と文殊は、イナンナとネアンのそれぞれを暗示する神様であったからである。

しかし、天橋立の北にある本家といわれる籠神社には、何かおかしな結界が張られていることをイナンナ自身が察知して、行きたがらなかった。

籠とは、そもそも龍を竹籠に閉じ込めることと書く。龍身が本体のイナンナには、直感的に名前からして嫌な土地と映ったのである。

そういう籠神社の直上にある成合観音はどうかというと、ここにも龍の伝承が中核にある。

伝承上、日本海にいたあまたの龍神たちが文殊の知恵で教化され、彼らを束ねる弁天と共に一つの観音に合体しているというのである。

つまり、いわばここでも封じ込めに類した話が見て取れるのだ。

その昔、人類がこの地にやってくることに猛反対して暴れまわった幾多の龍神たちを、文明創造のいざなぎいざなみが何とかしようと、インドからわざわざ文殊菩薩を招請して、彼らに得度させて鎮圧したという。

文殊の恩義に報いて、龍神たちはわざわざ橋立の砂州を造り、弁天が中核となって、龍神たちを連れて、人類はじめ生命全般に思いやりを持ってする成合観音として合体したというわけである。

。

しかし、ここに出てくるいざなぎいざなみの裏に、天仙たちの目論見と封神演義の要素を垣間見ないわけにはいかない。

そして、騙されたのか、それとも自らの意志でそうしたのか、弁天はじめ龍神たちは、観音の身として合神した。

観音はもちろん温厚、慈悲の権化である。荒くれものが温厚にふるまうという、いわば去勢の象徴かもしれないわけだ。

結果は、龍神たちが懸念したように、自然破壊をモットーとした人間たちの愚かな文明の興亡であった。

封じられた側の少なからぬ無念の思いが、今もこの時代に残っていてもおかしくはない。

イナンナは、そうした出来事を背負った眷属の霊を供養して回ったことになるだろうか。

だが、もういっぽうの籠神社は、未だに機能を活動させていたのである。

シノが最近知り合ったというターナという人物が、たまたま真名井神社に来ていたのだが、ターナが最近その境内地で撮った写真に、巨大な白龍と思しきものが写っていたのだ。

そればかりではない。別の写真には奇妙な光線が写り込んでいた。

籠神社に回ったとき、シノは宮司の海部氏に会えるということで、実際に会って懇談をしたときに、その写真を見せてもらった。

それは、この土地がどこの地域よりも霊的磁場が強いことを示していること。海外から訪れた霊能者もそれを絶賛したといういわれを、この宮司は力説した。

ネアンはこのとき、よもやこの宮司の家系が前世的な因縁のある家系とは思いつかなかった。

それを最初に指摘したのは、霊視能力を備えたシノであった。

それも、多少奇妙な推測であるが、ヤマトスクネ像がネアンに非常に似ているから、そうではないかというのだ。

しかも、このヤマトスクネ像は、どういう伝承によるのか、亀にまたがった姿で表されていた。

まるでそれは浦島太郎ではないか。

シノがネアンと亀であるイナンナの関係を知っていて指摘したわけではなかった。誰も理解できない、個人的にぞくつくような一致だった。

驚異的なシンクロとは、こういうものである。

だが、白龍といういわくつきの写真は、明らかに瓢箪の形をしていた。それは何だろう。封神の際に使われた機構であったのだ。西遊記に金閣銀閣の兵器で出てくるそれだ。

つまり、この地には、未だに瓢箪の機構が伏在していたのである。そしてその神社を名付けて、匏（ひさご：ひょうたん）の宮という。

ネアンはその頃、瓢箪には特別の思いを持っていた。西遊記に出てくる、天仙金閣銀閣の所有していた瓢箪は、魂あるものを魂ごと吸い取り、その中に閉じ込めてしまう。

そして、その中に居る者を消化液によって溶かしてしまうというものだ。

実に気味が悪い写真である。彼らはこれを白龍だといっているが、そう見えるものはそうでも良からう。

他の見たてをする者にとっては、そっちのほうが真実かもしれないのだ。

事前にチャネラーのセラに相談を持ちかけていたことは、けだしもったもな事だった。

セラと知り合い、事前知識を仕入れていたこと自体もまたシンクロであった。

セラのチャネル情報からすれば、訪れる参拝客のエネルギーを借りて、結界の呪力を強くする機構。

もしも特別なキーを持つものが行った場合、どんな効果が出るのか。

だが、セラはそんな事情は知らない。セラは私たちがすでに結界は解いているから、心配ない、どうしても心配なら、その時間に合せてエネルギーを送ってバックアップしますと応じてくれていた。

いかに強力なチャネラーたちが結界を解いたはずとは言うものの、有効性はどうだったのであろう。

それから幾ばくもたって、瓢箪の写真のような異界を醸す有り様を見ると、決して有効であったとは思えない。

ネアンはこのチャネラーのエネルギー的バックアップの甲斐あってか、その日の旅は無事に終わった。

ところが、その後、またも九つの日数のあとに、同時多発テロが起こったのである。

懸念したとおり、ネアンはキーワード、キーポイントの問題に遭遇してしまっていた。

ところで、火の鳥は鳥取日野の復活からおよそ一年をかけて、次の活躍の場を求めていた。

伝説のとおり、その機能は旧態文明を滅ぼし再生復活に導くことである。

火の鳥は、まず潜在的に旧態世界の焼却という役割を持っている。

このとき、シノとネアンの二人が醸した初動的指令に従って、終局を誘導する作用を引き起こし、そのきっかけ作りをしたのではなかっただろうか。

恥辱に満ちた被害を受けたA国は、テロリスト殲滅という言葉を旗頭にした。

だが実態は、たぐれば宗教対立に至るわけで、テロを潜在的に輩出するイスラム諸国が暗黙の敵とみなされ、その線に沿ってAA諸国に圧力がかけられるようになるのである。

第三次世界大戦の引き金になりかねないI国とP国の戦争という事態も、すぐその先に待っている。

そのような初動機を持つネアンに比べて、イナンナは神亀であり、その表情からして柔らかく、鈍重な感じではあっても、生命に対する慈愛に満ちていた。

イナンナは、世相の混迷と、天仙の差し向ける陰湿ないじめに遭い、苛酷な作業環境に置かれ、地上の生を受けて自らの責任と役割の二つを同時にこなす必要に追われながらも、決して投げやりには陥らなかった。

前夫との間に設けた子供3人は、まだ物心が定まらず、イナンナの手を煩わせていたし、また彼らを育て上げるためにイナンナ自身職業を持ち、それに時間の多くを割かれていた。

仕事が順調に行くも社会の安定あってのこと。子供を一人前にするにも、身の回りが順当であったことだった。

このため、日々の祈りは、世の中が良くなってほしい、人の心が良くなってほしいという善人が願う祈りそのものであった。

イナンナはけなげにも祈る。どうかこの世の中が続いていく中に、邪悪や不正義が駆逐されていきますように、と。

子供たちに、将来良い環境を与えてやれますように、と。

そのための旗頭としての役割も自認しているイナンナであった。

（ところがこの思いもやがて失われ、悪も世界の存続は必要（これは事実なのであるが）と唱えるようになり、ネアンと敵対するようになるのである）

ネアンの目を通して働く梵天は、愛しいイナンナの心情を汲み取ろうとした。

イナンナが生き甲斐とする仕事を見出した以上、学び終わるまで存続させたい。

また、子供の世代に激変や恐怖を味あわせないことも必要となれば、地上界の可能な限りの保全が必要である。

当初持っていた実験炉宇宙廃絶の意志は、梵天からすでに失せていたが、天仙と彼ら主導の現文明廃絶の意志はまだあった。

しかし、これも形を保ったまま治療し、存続させてやりたいという気持ちに変わっていたのである。

それはちょうど、切開手術によらず、免疫療法で経過を観察する癌に似ていた。

これは大きな方針転換となるだろう。

イナンナがけなげにも、心から今のまま良くなっていくことを訴えていたのだから。